

ニッポンの美の原点 特別展「縄文—1万年の美の鼓動」

東京国立博物館・平成館（東京・上野公園） 2018,07.03～09.02

「縄文時代」は、旧石器時代が終わったおよそ1万3千年前から1万年ほど続いた時代のことで、縄目の文様をもつ土器が使われたことに由来している。

当時の人々は、山や森、川や海といった景観が整い、多様な自然環境を利用して、狩猟や漁撈に植物採集を基本的な生業として定住生活を行った。そして、土器や石器などの実用的な道具に加え、装身具、土偶、石棒などを作り出した。



《遮光器》土偶 青森県つるが市亀が岡遺跡 上部右図

目に当たる部分がイヌイットやエスキモーが、雪中行動する際に着用する遮光器のような形をしていること（目の古代表現）から、この名称がつけられたもので、土偶の有名な形であるが完全な形で発見されることは非常に稀である。

《火焰型土器》》高さ 46.5cm 新潟県十日町市笹山遺跡



縄文土器で唯一の国宝の土器は、“交流の証”として立体的で装飾性に富み、見る者を文句なしに揺さぶる土器で、内側には焦げた痕が認められることから当時は煮炊き用として使用していたものとされている。

この“粘土による豊かな造形の極みといえる土器”は、文中期に集落が拡大し、生活が安定したために手間をかけて装飾性の豊かな土器が生まれたものとされる。

作品上部の突起は煮炊きには邪魔であると思われるが、当時の生活では湯沸かしだけでも1時間以上も要したとされ、その労力のために使う道具には“こだわり”があったとも推定されている。

展覧会は、「縄文—1万年の美の鼓動」を「暮らしの美」「美のうねり」「美の競演」「縄文美の最たるもの」「祈りの美、祈りの形」「新たにつむがれる美」の6章から構成されて「1千万年前の美」を体験することができる催事である。